

世界には どんな問題があるんだろう？

ある日本の中学生の一日を想像してみよう。

朝起きて学校に行き、一人一つずつ用意されている席につく。自分の教科書とノートを取り出し、各教科担当の先生から授業を受ける。お昼休みには栄養バランスの取れた給食、放課後には部活動に汗を流す。私たちに就いては当たり前のこと。しかし世界には、学校にすら行けない子どもたちが、まだまだたくさんいることを忘れてはならない。

「皆、世界の一人だということ意識して、地球上の問題について考えよう！」

4月下旬、東京の西側から延びる黒目川のほとり、豊かな自然に囲まれた埼玉県新座市立第三中学校。3年4組の教室では、担任の井戸秀紀先生の社会科の授業が行われていた。

「今日は、ミレニアム開発目標(MDGs)について勉強します」

MDGsは、中学校の教科書には載っていないトピック。しかし、「8つの目標を通して、世界の問題について幅広く学ぶことができる。教育、保健、環境、ジェンダーなど、自分が目を向けてこなかった分野にも関心を持ってほしい」と思い、社会科で取り入れることになった。



教室で世界の人を 思いやる心をはぐくむ

戦争、食料不足、干ばつ、環境問題…。地球上には、私たちが想像できないほど、過酷な状況に生きる人たちがいる。そんな世界の問題について学び、今、自分たちができることを考える。その実践の場、新座市立第三中学校の井戸秀紀先生の授業を取材した。



井戸先生の授業はグループワーク中心。世界の問題について、生徒同士で話し合うことで理解が深まる



教室にも、生徒手作りのペットボトルのキャップの回収ボックスが設置されている



「身近にできることから見つけていこう」。第三中学校では、途上国にワクチンを贈るため、昨年からのペットボトルのキャップの回収に取り組んでいる

とにしました(井戸先生)。

授業は意外な形で始まった。一つ一つの目標の説明から始まるのかと思いきや。

「この中から一つ目標を捨てなければいけません。どれを選びますか？」

MDGsは世界の貧しい人々を救うためにどれも必要。一つ削るなんてできない。そんな戸惑いを見せながらも、グループごとに議論が始まった。

「食べないと死んじゃうから、飢饉の問題は外せないよ」

「学校に行かなくても、家で勉強すればいいんじゃない？」

「健康な赤ちゃんが生まれてくるためにも、お母さんを守ることは大切」

さまざまな意見が飛び交う中、6つのグループが、捨てる目標に選んだのは、子どもたちへの教育(目標2)と先進国のパートナーシップ(目標8)。

「直接命にかかわるものではない。まずは食べないと死んでしまう」「先進国が助けるだけでなく、貧しい人たちが自身も努力していかないと。途上国に行ったことがある訳ではない。しかし彼らに想像力を働かせ、途上国の人々に思いをはせているのが分かった。

「健康な赤ちゃんが生まれてくるためにも、お母さんを守ることは大切」

さまざまな意見が飛び交う中、6つのグループが、捨てる目標に選んだのは、子どもたちへの教育(目標2)と先進国のパートナーシップ(目標8)。

「直接命にかかわるものではない。まずは食べないと死んでしまう」「先進国が助けるだけでなく、貧しい人たちが自身も努力していかないと。途上国に行ったことがある訳ではない。しかし彼らに想像力を働かせ、途上国の人々に思いをはせているのが分かった。

「健康な赤ちゃんが生まれてくるためにも、お母さんを守ることは大切」

MDGs 一番大切な目標はどれ？

井戸先生は教師三年目の昨年8月、JICAの教師海外研修でモンゴルを訪問した。「途上国で起っていることを自分の目で見て、生徒たちに伝えたい」。そんな思いで参加を決意したという。「現地で出会った途上国の人々が抱える問題を、どのようにアレンジして教材化していくか。常に一教師として、授業で、生徒に伝える」ということを意識して行動していました。帰国後も、参加者同士で勉強会を重ねた。そのようにして生まれたのが、今日の授業だ。

「それでは最後に、自分が最も必要だと思う目標を選びましょう」

世界で優先すべき課題は何か。これまで授業で学んだ知識をフルに活用して考える生徒たち。「助けるべき命がないと、薬を開発しても意味がない」「天候が不安定だと、コメも育たない」「リサイクル運動とか、環境なら僕たちでもできることがあるかも」。まずは世界を身近に感じてほしい。そんな井戸先生の思いが伝わった意見ばかりだった。

授業終了後、生徒たちの感想文を見せてもらうと、どの紙にもびっしりと感想が書かれていた。「私たち中学生に



(上)グループごとに悩みに悩んだ結果、選んだ目標を黒板に張っていく
(下)井戸先生の指導のもと、活発な議論が展開。「将来、途上国の人を手助けしたい」(山路絵理香さん、写真)、「食料問題についてもっと勉強してみたい」(楚間元希くん)。国際協力の担い手は、確実に育っている

井戸先生は昨年8月に「JICA教師海外研修」でモンゴルを訪問。現地での体験を授業で伝えている



井戸先生は昨年8月に「JICA教師海外研修」でモンゴルを訪問。現地での体験を授業で伝えている

※国際理解教育・開発教育に関心のある小中高の教員を対象に、JICAが毎年実施している開発途上国での研修プログラム。約10日間、JICAの支援国で国際協力の現場を視察し、参加者はその体験を帰国後の授業で生かしている。募集の詳細については、最寄りのJICA国内機関へ。